

＜エッセイ＞

アイドルソングにおける「伴走」の言葉を求めて

Words that Walk Alongside: A Lyricist's Approach to Idol Music

山崎あおい

Aoi Yamazaki

「アイドルとの出会いはいつだったろう。」

そう考えるたび、決まって思い出す光景がある。湯気の立つ浴室で、母が何気なく言った。

「〇〇ちゃんママが、モーニング娘。のチケット当てたんだって。あおいも一緒に行く？」

小学一年生か二年生の頃だったと思う。

私は、その誘いを断った。

今となれば不思議な意地だが、当時の私は「普通の女の子が好きなもの」を自分も好きだとバレてしまうことが、妙に恥ずかしかったのである。

小学生にして『巨人の星』を愛読書にしていたり、男子に混ざって野球チームに入りたいとゴネてみたり。人と少し違う自分であることに、幼いなりプライドを持っていたのかもしれない。早くも、中二病であった。

けれどやはり、ときめく心はそう簡単に誤魔化しきれない。友達の家へ遊びにいけばモーニング娘。のトレーディングカードを黙々と眺めさせてもらうし、「努力！未来！」とテレビから聴こえれば視線が向く。私の胸を特別躍らせるあの可愛いお姉さんは、新垣里沙という名前らしい。

あの日コンサートへ行っていたら、もっと早くアイドルを好きになっていたのだろうか。その答えはわからない。ただ一つ言えるのは、私の中で「アイドル」は、その頃から静かに居場所をつくり始めていたということだ。

高校生になると、その小さな興味は思わぬ形で大きくなる。シンガーソングライターとしてデビューを目指し、東京へボイストレーニングに通っていた私は、上京するたびに秋葉原へ立ち寄っていた。目的は、AKB48 のファンだった弟に頼まれたグッズを買うこと。ただのお使い……の、はずだった。

事務所のある原宿から山手線に乗り、秋葉原で降りる。「機械音痴のJKなんてお断り！」と拒まれるような居心地の悪さと、ひとり海外へ出てきたようなワクワクを抱えながら、萌え～な看板だらけの通りを抜ける。地元にあるのより数倍カオスなドン・キホーテの、カオスな陳列棚の迷路を潜る。するとようやく辿り着ける、AKB48 の公式ショップ。メンバーの写真がずらっと並び、最新シングルが流れる店内のその更に奥には、AKB 劇場がある。

振り返る。ここまで来た道。さらに戻る。青函トンネルの先、遙か遠くにある札幌の実家。そこにあるテレビで見ているアイドルたちが、今、目と鼻の先にあるこの場所をホームとして、本当に歌い、踊っている。東京に。芸能界に。何よりアイドルに胸が高鳴った。

やがて私は、9期メンバーで同い年の、島崎遥香さんを好きになった。推し、というやつだ。気がつくと、お年頃な弟の関心は別のものたちを転々とし、私だけがヒートアップしていた。

興味は、アイドル本人だけでは終わらない。

この曲を書いたのは誰だろう。どうしてこの言葉を選んだのだろう。衣装は？MVは？

気づけば私の憧れはステージの上ではなく、その舞台裏へと移っていた。

アイドルという存在は、アイドルだけでは完成しない。作詞家、作曲家、振付師、スタイリスト、映像監督。ジャンルごとのプロ集団によるチームプレイだ。全てを自己完結するシンガーソングライターとは真逆の世界観。「知りたい」が「私もその一員になりたい」に変わるまでに、時間はかからなかった。

と、ここまで書いて思い出す。このエッセイのお題は「大学での学びとアイドル」だった。

大学での専攻は「防災」。毎週、避難計画について議論し、夏休みには地層を見に行く。大學生の私にメンカラを与えるのであれば、土色だ。アイドルとは、あまりにも遠いキャンパスライフであった。

それでも、「大学へ行かなければ、私はアイドルソングを書いていない」と断言できる。

大学四年生のとき、私は発声障害になった。原因はわからない。ただ、歌えなくなったのだ。

シンガーソングライターとして活動していた私にとって、それは未来を失うような出来事だった。

けれど、その挫折が人生の向きを変えた。

「自分が歌えないなら、誰かに歌ってもらう曲を書こう。」

そう考え、本格的に DAW でデモ音源を作り始めたのがこの頃だ。時を同じくして、大学の一つ下の学年に在籍していた鈴木愛理さんが私の拙いデモを気に入ってくれ、ソロデビューアルバムで歌ってくれることになった。なんたる幸運！極端に友人の少ない学生時代だったが、そのうちの一人が挫けかけた足元を照らしてくれた。あの一曲をきっかけに作家としての活動が広がり、やがてハロー！プロジェクトをはじめ、多くのアイドルへ楽曲を書く機会につながっていく。

初めて、自分が書いた曲に振り付けがついた日のことを今でも覚えている。衝撃的なくらい、うれしかった。イメージが具現化されてゆく、その感動。

武道館、横浜アリーナ、東京ドーム。シンガーソングライターの自分としてでは届かない大きなステージで、自分の曲が歌われる景色にも出会えた。

けれど、夢が叶うほど、考えるようになったことがある。ステージに立つ彼女たちの多くは、まだ十代だ。弟のおつかい一つで人生の角度が変わった、あの頃の私と、そう変わらない。身近な言葉や価値観に揺れ、まっさらで、美しく、危うい心を持っている。

私にとってアイドルソングを書くことは、シンガーソングライターとして夢を追いかけた先に見つけた「二つ目の夢」だった。でも、彼女たちにとっては違う。今この瞬間が、人生そのもののものだ。

どんな距離感で、どんな価値観で、どんな自分として曲を書くべきなのか。歌い手を傷つけず、それでいて嘘も書かずにいるには、どうすればいいのか。

ふと思う。18歳でデビューしたばかりの私は、どんなに傷ついても、本意ではない歌を歌うことになっても、とにかく結果が欲しいと喘いでいた気がする。

考えれば考えるほどに、ドン・キホーテよりも深い迷宮のなかに立ち尽くしてしまう。

少なくとも、目指したいのは代弁する曲ではなく伴走する曲だ。本人が歌って少しでも勇気が湧き、あるいは距離を保って歌うことができ、ファンが聴いて「この人に似合う」と思える。そんな言葉を書きたい。

「これから、どんな曲を書いていきたいですか。」

そう聞かれるたび、思い出すのは、お風呂場でモーニング娘。のコンサートを断った、小さな私である。あのときは、人生がこんなふうにつながっていくなんて想像もしなかった。

振り返ってみれば、お風呂場でのひと言も、秋葉原へ通った日々も、声が出なくなったことも、すべてが伏線だった。

人生は、あとになってようやく物語になる。

アイドルソングを書くという仕事も、回収ではなく、伏線なのかもしれない。

そんな結論にしてみると何だか、楽曲締め切りの量に喘いでいる現在深夜二時半の私の背景にも、エイトビートの元気なアイドルロックが流れてきそうだ。

